

このザクセン皇帝の山林学校に入り、業を受けんとするに当り、携え来りたる所の日本の林木五種の標本を、時の校長ユーダイヒ氏に呈し、長くこの校に陳列せしめ、以て入学の記念となすというのみ。」  
種物の裏書きも大意このようなもので、これを苗圃に種蒔きして、広く全欧に移植させ、長く入学の記念を表わそうとするものである。

(●第五十四日目)

五月十五日 木曜日 快晴 この日はヤソの祭日で学校は休み。

午前五時起床。朝食後小散歩をする。折原兄宛及び不二道百十五名宛の礼状を出す。礼状の概略は、海外留学に際し至誠の厚情をもって私のために難行をお執りいただき、誠にもって感激に堪えないところであります。その行帳は常に机前に掲げて、長くその誠情を拝させていただきます云々。午前十一時、学校に植物四十七種及び木層の五本の標本を持参し贈呈する。大いに喜ばれ、直ちに植物学受け持ちの教官に命じて播種させ、長く保存するといわれた。

この日は一時半に校長からの会食の招待を受けた。このため定刻に出掛けたが、初めての西洋の儀式のため少しも分からなかったが、ユーダイヒ氏の婦人に親切に教えていただき、不都合なく御馳走になることができた。このとき実に嬉しかったのは、私は礼式等知らないうえ、大勢の貴賓の前ということもあって、余り口を利かずに遠慮していたところ、校長は私が種物に添えて出した和洋の樹名について、ドイツ語で説明してあるものを持って来て、貴賓一同に見せたことである。そしてこの様によくできていと大いに褒められ、恐縮してしまった。

欧州の習慣で、食堂に入るときには他人の細君や人の娘を伴って行くのが礼儀であるが、私は何も知らないので心配していたところ、ユーダイヒ氏の婦人が自ら伴ってくれたので、何も差支えなく済むことができた。

夜、ドクトルホット氏(助教)が訪れて来た。同氏に教業の絵紙を与えたところ、大いに喜んだ。十時に寝に就く。

(●第五十五日目)

五月十六日 金曜日 快晴

午前五時起床。七時より十時まで学校。その後東京の志賀並びに松野両先生に礼状を出す。夕食後、シミット氏と散歩する。

(●第五十六日目)

五月十七日 土曜日 快晴

午前五時起床。八時より十二時まで授業。この日午前六時朝食後、前の川の辺りを散歩していたところ、何だか手紙の来ているような心持ちがしたので、七時半頃帰ったところ、やはり父上並びに銚子からの詳しい手紙が来ていた。実に嬉しいこと千金を拾ったよりも、何よりも嬉しく、家を出てから五十六日、何の音信も聞かず、パリ、ベルリンにいたときから、早くターラントに行つて、家の音信に接したく急いで来たのに、何の音信もなく、ターラントに来て九日間。今日は音信があるかと、学校または散歩より帰り、明日は音信のあることかと、朝も早く起き、郵便配手の通り過ぎたのを恨めしく思っていたのに、今朝はいかに嬉しいことであろうか。慈愛なる父上の詳しき手紙、また最愛なるわが妻からの詳しい日誌等で、わが日本の両親はじめ妻子親族の健康なることを知ることができ、その嬉しいことは他に例えようもなく、何度も繰り返し繰り返し読み、大いに勇気づけられた。また河原井の兄弟子供の写真も入っていて実に嬉しかった。夕食後、相変わらずシミット氏と散歩する。

(●第五十七日目)

五月十八日 日曜日 快晴

午前五時起床。この日は教会を休んで、四人の教授宅を訪問しお礼を行った。昼食後、ロンドンにいる草刈氏に船中で世話になった礼状を出す。四時からシミット氏とハルタ村に行き音楽を聞き、その後アルベルトザロンで舞踏を見て帰る。しかし何処にいても見るよりも見られるほうが多い位である。しかし私の回りには教員や学生が大勢いるので、いつも賑やか

に話しているので平気である。

(●第五十八日目)

五月十九日 月曜日 快晴

午前五時起床。朝食後、小西氏に郵便を出す。夕食後、シミット氏他一名と前の山を散歩する。帰路、酒屋にて葡萄酒とビスケットを買う。店の中に学生がいて、大いに喜び大騒ぎに取り扱われ、一杯の酒を飲まされ、お供をつけて帰された。お供は学生らの買物や靴磨きなどをして暮らしている人物で、これにも三十ペンニツヒの散財をさせられた。まったく大騒ぎに取り扱われるのはかえって迷惑であるが、市民などには大いに幅の利くことなので仕方ないことである。

(●第五十九日目)

五月二十日 火曜日 快晴

午前五時起床。七時から九時まで授業。昼食後、前山に登り散歩して帰る。前田校長並びに目黒の前田先生に礼状を出す。夕食後、シミット氏、ステットネル氏等と散歩し、九時に帰って勉強をして十一時半に臥す。この日下女たちが郵便切手を欲しがるので、二枚ずつやったところ大いに喜ばれた。まだ沢山あるが、一度に沢山やると安っぽくなるので、少しずつやることにした。

(●第六十日目)

五月二十一日 水曜日 快晴

午前五時十分起床。天気は快晴だが埃は起きない。緑葉朝日に映り、景色もよい。前の小川に沿ってステーションの方へ散歩し、日光を拝して帰る。ターラントは何だか日が早く上がって遅く入るようである。つまりこの時期は午前四時一分に太陽が上がり、午後七時五十五分に日が入る。朝六時頃にコーヒートと牛乳とパン一片を食す。これは部屋で食べる。午後一時に近辺の料理屋で昼食をとり、夜七時にまた料理屋に行つて食事する。

これは一般の習慣で、独身者は皆自分で煮炊きをしない。そのためターラントには大きな料理屋が二十軒あり、皆相応に繁盛している。昼食はスープと肉と野菜等があつて一番上等である。夜はジャガ芋にビーフステーキ位で、昼食は大抵一マルク位が通例で、夜はこの半分である。この日は七時から十二時まで授業があつた。夕食後、ドクトルシミット氏と散歩する。七時半に帰つて銚子宛の手紙を認める。午後十時に臥す。

(●第六十一日目)

五月二十二日 木曜日 快晴

ターラントに来て今日は丁度二週間目の日である。

午前六時起床。七時から十二時まで授業に出て、また午後四時から教官と山林の実習に行く。七時に帰宅。直ちに夕食をとる。今日は疲れたので、夕食後散歩はしなかった。明日は祭日のため休みなので、この手紙を認め終われば直ちに臥すつもりである。

前便にも申し上げたとおり、ターラントは実に景色も気候も良いところである。写真を三枚同封。写真の裏の図と同じ位置にその名を記してある。私の下宿は、学校から一丁ほど先である。学生は全部で七十名程です。皆高等中学を卒業して入校を許されたものである。この内魯西亜(ロシア)政府から五人、埃太利(オーストリア)から数人、その他他国人もいる由。しかし亜細亜(アジア)は私一人である。

この学校は欧州でも最も評判の良い学校のため、沢山の学生がいる(もつともザクセン人の学生は、皆ザクセン国の森林官になるため、人数に限りがあると聞いている)。

他の大学と一緒にある林学部などは、学生は実に僅かであると聞いている。しかしミュンヘンの大学は随分と盛んのように聞いている。

(ターラントの山林学校の) 学課は二年で卒業できるようになっている。しかし学生は聞ける学課も半分、若しくは二三ヶ位ずつ聞くため、三四年かかつて卒業している。そのため私は二級に入れられ(校長の指図により) たため、一年で卒業できる見込みである。私はことごとく学課に出るため、

皆々学生は初め驚いていた。

この地の学生は、毎日二時間位学校に出て、後は部屋になどいることなく、互いに酒屋に集まってビールを飲むことを業としているのである。感心なのは、この地の学生は、日本のように色気の無いことで、髭をはやして居酒屋のビールに酔い、歌を歌って遊んでいることである。女の話などをするとはなく、まるで日本の子供のようである。

しかし欧州の学生の有りがたいことは、一生涯専門の勉強をできることとであり、徐々にでも大学者になれることである。(欧州の学生は)中々少しの間に知識を得るにおいては、とても日本人にはかなわないことである。今日も高等数学の教場で、例の私の学問の手帳を見せたところ、学生らはその学んだ事の多いことに驚いて、「貴方はもう学ぶことはないだろう、何のために来たのか」と一同から言われた。しかしこれはご追従で、この地の教員の専門に詳しいことには驚いた。その代わり、一つの学課を生涯教えているのである。しかし、私は実際この地の学生にはそんなに負けないつもりである。

私はパリとベルリンで日本の留学生の様子を見てがっかりしたが、これは日本の怠け書生のことだけで、実際独乙の学生はよい性質をしている。すべて淡薄で義を好み、人に対して決して失礼なことはせず、また他国人を敬愛し、これと近付きになることを名譽に思っているのである。

また当地の学生は皆決闘の組合をもっており、三つや五つの生傷のない学生は一人もない。中には未だ新しい傷のある学生も大部いる。もしある学生が、私のような他国人に対して失礼な事をしたときは、その組合の者から罰せられるよう規則が厳重なため、実に丁寧にしてくれる。

もちろん私は決闘の組合に入っていないので、決闘をすることは無いのでご安心を。着後、私の有様は総じてこのようなもので、安心してくださるよう、伏して祈る。

御両親はじめ御一同、益々御機嫌よく暮らされますことを。

(明治)二十三年五月二十二日 夜九時認め終る

静六再拜

本多御両親様 他皆々様

### 洋行日誌 第九報

(●第六十二日目)

五月二十三日 金曜日 快晴 ヤソの祭日のため休日

午前七時起床。散髪をして湯に入る。髪は日本の神戸で切ったままなので、丁寧に切ってもらおうと思ったが、二分間ほどで済んでしまった。側髪も顔も洗うこと無く、十ばかりチャキチャキやってお終いである。顔も口の回りのみ刷って、襟や眉などを刷ることもない。お粗末なのに呆れてしまった。これでは自分で剃るほうが余程よいので、髪を切るほかは出掛けないことにした。もともと代金も僅かに三十五ペンニツヒ(日本の十銭程)である。

しかし湯屋は立派な家である。もともと当地の新聞に常に広告を出している、都会人の来る旅館兼湯屋であるが、錫製の湯桶で一マルク十ペンニツヒとは三十五銭程で随分と高いものである。湯には船中に入ってからベルリンで一度入っただけなので、一時間程一人でゆっくり入った。髪切りと比べたら割合としてはよい。しかしこの地の人は一年位湯に入らない人も多くと聞く。もともと「私なども」毎朝冷水とシャボンでもって体を洗うため、案外清潔である。また一つには、当地は東京と異なって風が無いため、埃が体にかからないこと、また洋服のため服の内部にごみが入らないことも関係しているのだろう。

昼食後、ドクトルシミット氏が来たので、小西君から貰った両方に引き出せる箱を与えた。大いに喜んだ。今朝、フライベルの向井氏から招待状が来た。午後三時に支度をしてステーションへ行き一学生と同行となって、中等汽車(これはお付き合)に乗り、四時四十五分頃にフライベルに着した。一人になった後、二万人もいる都市で宿所も町名も分からないため困ってしまったが、幸い郵便配夫に会ったので、尋ねたところ町番地を書いて教えた。その後、ある道辻で考えていたところ、婦人がどこへ行くのかと尋ねて来たので、その書付を見せた。実は郵便屋が書いた文字が私には読めなかったのである。その婦人は私を向井氏の宿所まで連れていってくれた。

米国では日本人は支那人と間違われて、石を放りつけられると聞いたことがあるが、ドイツでは日本人は大変よい扱いを受ける。

着後、夕食の馳走になり、六時頃日本の学生四人、的場、石田、山田文太郎、某に会い種々の話をした〔都合六人の日本人〕。ビールとカステーラを食し、四人は十一時半に帰宅。私は向井氏と一時半まで学術上の話をして、別室で臥した。向井氏は海軍省から精鉄のために留学しているもので、四年滞在しているという。

総じて日本人はよく知られている。私にも、ただターラント本多と書いた手紙が直ぐに届く。

(●第六十三日目)

五月二十四日 土曜日 快晴

午前六時に起きたが、靴を持参しなかつたので再び寝て、待てども来ないので九時に起きた。靴は次の間に持参してあつた。大笑い。午前十時頃から日本人が皆集まつて来て、私のために日本飯を作ってくれた。各自手分けをして、米を研ぎ、胡瓜や人参を切り、鰹節かきなどをして漸く出来上がった。牛肉の薩摩煮、胡瓜の三杯酢など大変美味しかった。ビールと蜜柑を食べる。蜜柑は一ヶ六錢程であるが、日本の三倍位あつて大変美味しい。五時までトランプをして、皆にステーションまで送られて、五時三十分の汽車でターラントへ帰る。時刻は六時四十分。直ちに夕食をして寝に就く。

(●第六十四日目)

五月二十五日 日曜日 快晴

午前七時起床。八時半から十一時まで教会へ行き、帰った後向井氏へ礼状を出す。昼食後、ミュンヘンにいるグラスマン氏の兄に手紙を認め、同氏から託された荷物を送る。また荒木氏から託された荷物も送る。これで厄介物はなくなつたので大安心。夕食後散歩。十時臥床。

(●第六十五日目)

五月二十六日 月曜日 雨天

ヤソの祭りでこの週間皆休み  
午前七時起床。ロンドンにいる草刈氏から二十四日付けの書状が来る。二日で来たのである。勉強をする。

(●第六十六日目)

五月二十七日 火曜日 曇天

午前六時起床。朝飯前に前山を散歩する。助教連の所望により日本服を着てみせる。昼食後、数人と射的場の方へ散歩する。帰途、草花を摘んで帰り、机の上に置いたところ大いに目を喜ばせてくれる。日本には珍しい花、しかも美しい花がたくさん路傍に咲いている。散歩する人々は皆摘んで帰る。

午後三時、向井氏が訪れて来る。同氏はこの先のドイベン村の製鉄場へ研究に行く途中であるという。五時に伴つてビール屋でビールを飲み、またステーションでコーヒを飲む。見送りのつもりで行つたところ、近所だから同行したらどうだと、私の切符〔往復〕まで買ってくれたので、見物かたがた同行した。

二十分ばかりで同村に到着。同氏は旅館をとつて夕食をとる。私は炭坑を見て、八時半の汽車で帰宅する。その後宿の主人の所へ話に行き、十時に臥す。

実にこの近所は、殖産事業がうまくいっている所で、畑の下は皆石炭の山で、売り物のように見える。総じて種々の製造所等も多いため、農林事業と比較するにも大変便利である。

(●第六十七日目)

五月二十八日 水曜日 曇天

二三日来、氣候がやや寒冷を覚える。昼食後小雨が降る。トイベン滞在の向井氏からドレスデンへ一緒に行つて、服を作つてはどうかといわれたが、行かないことにした。これは私が同氏に服屋はどこがよいかと聞いた

ためである。夕食後散歩して十時に臥す。この日寒暖計は、華氏三十度、摂氏〇度になったという。

(●第六十八日目)

五月二十九日 木曜日 曇天

午前八時起床。朝食後髭を剃る。髭剃りは近頃上手になり、顎の下までよく刷れるようになった。例年のことのようにだが、私が来た頃から四五日來かえって寒くなった。しかしまた直ぐに暑くなるという。幸いに船中から常に冷水で皮膚を鍛えて来たせいも、少しも風邪を引かず食事がよく進む。

食事は実に美味しく感じ、時に時間が待ち遠しい。だが食事のときは他の助教連と会食するので、私一人だけ多く取る訳にもいかず、私は二度食事を取る。そのため一番多く食べるのである。しかし、幸いアセツソル林務官補は毎日山道を歩いて来るので、大食の連れ合いとなるのである。よくこなれて、よく腹が空くのである。朝食から昼食までの間があまり待ち遠しいので、朝食の時にパンを五片ずつ余分に貰っておくことにしたが、これでも足りないくらい毎日食い尽くしてしまう。

この時期、芍薬の花が盛んで、各家の庭園に咲き乱れ非常に美しい。牡丹はないようだが、その他に美しい花が多い。思いの外である。

午後四時洋服屋が来る。黒のフロックコート一組を注文する。寸尺を取る。夜、ドクトルヒルトネル氏が来訪し、押し葉を見せてくれる。十一時臥す。

(●第六十九日目)

五月三十日 金曜日 小雨

午前八時起床。朝食後、植物園に散歩する。これは学校のもので、実に広大で中には博物館もある。景色の良いところも多く散歩には最も良い。夕食後、向井氏への返書とバリの坪野氏への手紙を出す。

(●第七十日目)

五月三十一日 土曜日 半晴

午前八時起床。依頼があったので日本服を着て、プロヘックルニツチセ氏に写真を撮らせることを許す。即ち送ったところの写真はこれである。この朝グラスマン氏の細君の父からの返書と荒木君からの荷物着の返書が着た。大変親切に種々のことを伝えてきた。

昼食後、エデルクローネという村の方へ散歩する。二里程の所で、道は谷に沿って景色のよい所が多い。日は暖かで、水は清く、ちょうど去年の春、天城峠に行ったときと同じような所なので、去年の春を思い出してしまった。茶店で菓子を食べた四時に帰る。大変くたびれてしまったので、六時過ぎまで昼寝をした。夕食後、シミット氏と市内を散歩。十一時に臥す。

(●第七十一日目)

六月一日 日曜日 曇天

午前七時起床。八時から教会へ行く。美しい衣服を着た小男小女らの賛美する有様は、誠に殊勝でよい気分である。宗教上のこと、学問上のことが多いといえようが、この「歴史上」勇敢な欧州人種が、今日のように温厚な有様に導かれているのは、宗教の効に帰すものである。皆々私の親友のような気がして、誠に美しき嬉しき心になった。

荒木氏に返事を出す。昼食後、ドクトルシミット氏及びドクトルホッタ氏の誘いによりドレスデンへ行く。二時四十五分発の汽車で、中等切符の往復を買って求め、三時にドレスデンに到着。ドレスデンはこのザクセン王国の首府であり、人口は十五万人余りある。ベルリンと同じくらい賑やかである。市内を見物して、イルベ川〔東京の墨田川のような所〕の船で、有名な景色のよいピリトリアホールという所に至る。茶店で休憩し景色を眺める。その後、川を手前に渡りレルラー園で休み菓子を食べる。

この日は日曜。特に午後天気が良くなったため、実に多くの群衆がいる。欧州人のよく遊ぶことには驚きである。しかし、よく働くから遊べるので

あろう。夕食を食べた後、一つの舞踏場に入り舞を見る。日本のものより殺風景であるが、その繁盛ぶりには驚いた。十時三十分の汽車で帰りただちに臥す。ドレスデンまでは日本の三里くらい、汽車では二十五分である。

(●第七十二日目)

六月二日 月曜日 快晴

午前六時二十分起床。今日から授業があるので、直ちに仕度をして、七時から十一時まで学校で授業を受ける。昼食後ドクトルヒルトネル氏と前山を散歩する。同氏は植物学の助手で、実に生涯植物だけを相手に生活する人だけあって、その詳しいのには驚いた。同氏は私の植物の押し葉を見て、その熱心なのに喜んで、種々の植物を集めて来て、自らこれに名前を書き記し、かつ自分の紙でもって押し葉をしてくれた。私は元來植物が専門ではないが、同氏の厚意と私自身のためにもなるので、しばしば散歩に出て植物の全部を採集することを約束した。

私のためになるといふのは、植物の名前を覚えるだけでなく、健康にも益があるからである。私のような者は、朝六時から夜十時まで、少しも閑暇がないようにしなければならない。何故ならば、暇があれば故郷のことを思い起こすからである。しかし、終日本と首つ引きでもかえって悪いため、勉強をしては散歩に出て、散歩しては勉強するのである。今はまた植物の押し葉を採集するのも面白くなり、しかも家でも押し葉の手返しが必要なため多忙である。帰朝の時までには欧州各国、否世界の植物の名をことごとく暗記して、その押し葉を土産にしようと思っている。たま一つ楽しみが増えた。

近年学術の進歩は日々著しく、自分ながら嬉しく感じつつある。夕食後、植物の実験室に行ってみた。ここでは植物学の助手三人が三百六十五日つめつきりで、一人は植物の化学上のことを研究し〔シミット氏〕、一人は植物の名や種類のみを研究し〔ヒルトネル氏〕、一人は植物生理上のことだけを、各自手分けして研究している。その専門の他は余念なく、飽きずに研究しているのには関心した。またこの国政府が学者を養い置くこ

とも感心した。有名な学者を排出するのも当たり前というものである。現に私が持参した種物も植物園に蒔かれた他、ここではストープで暖めて皿の中で発芽させ、一々顕微鏡でもって観察されている様子には驚かざるを得ない。その他動物、化学など各専門にもまた多くの助手がいて、生涯一つのことを研究している。

(●第七十三日目)

六月三日 火曜日 曇天

午前六時起床。十二時まで授業。今日五月三十一日までの宿の勘定をする。衣服を払うはけを売りに来たので、一つ買い求める。九時寝に就く。

(●第七十四日目)

六月四日 水曜日 快晴

午前六時起床。十一時まで授業。今日書籍館(図書館)へ理済学(経済学)と森林学(林学)の書籍を見に行った。書籍館の人も親切にしてくれ、多くの書籍を見せてくれた。しかも家に持ち帰って長く見られる規則なので誠に都合がよい。しかし金があれば買いたいのが書籍である。よい本が沢山ある。しかしこれは限りがない。日本に帰って取り寄せることもできるので、なるべく書籍館の良書を読み尽くすよう心掛けていく。

昼食後、ヒルトネル氏と植物園を散歩する。植物を採集する。夕食後シミット、ステットネル氏らと近郊を散歩する。

この日サイヤン国の全図を購入。

(●第七十五日目)

六月五日 木曜日 快晴

午前六時二十分起床。七時から十二時まで授業。昼食後、ステットネル氏に招かれ山腹(茶店、これは各金持ちは小亭を眺望のよい所に設けるもので、涼み場所となるものである)において、コーヒー、菓子、酒等を馳走になる。他に来客が数人あった。

実に嘘はつけないもので、ステットネル氏が言うには、この国では花片

を一方から愛するか、愛せぬかと数えつつもぎ取り、愛するの所で終われば、愛される兆しと子供達が遊ぶのだという。日本にもあるのかと問うので、やはり同じような子供の遊びがあるという、それならば是非教えてくれという。私は忘れてしまっていたので、いい加減に「ごまかそう」と思い、「イツチク、タツチク、タイムスサン」と言っておいたら、そのことをステットネル氏はよく覚えていて、今日の来賓客の前で皆に教えている。私は思わず背中に汗が出てきた。

夕食後、シミット、ステットネル氏らと散歩する。この日向井氏から手紙が来て、次の日曜日に招かれたが、返書を出して行かないことにした。

(●第七十六日目)

六月六日 金曜日 快晴

午前六時起床。七時から十二時まで授業。午後、服屋が仮縫いを持参する。夕食後ホイエル氏と散歩する。十時就寝。

(●第七十七日目)

六月七日 土曜日 雨

今日、地理学上の実施演習のため、十里程離れた所に旅行する筈になっていたが雨のため中止となった。今朝バリにいる坪野平太郎氏から手紙が来た。今日は雨天なので終日自宅で勉強をした。しかし都合のよいことには、下が料理屋なので、雨が降っても差し支えないことである。この家は下を料理屋に貸し、二階と三階に住めるようになっていて、私の部屋は二階である。

(●第七十八日目)

六月八日 日曜日 曇天

午前七時起床。八時に教会へ行き、帰ってから手紙を認め第九回の報告を出す。

洋行日誌 第十報 自二十三年六月九日

(●第七十九日目)

六月九日 月曜日 快晴

午前六時起床。七時から十二時まで授業。午後三時から一里程の所へ山林設制の実施演習のため、教員及び学生三十名程と出掛け七時に帰る。道は山の陰にあつて、下に溪流があり景色はよいが、山道なので大いに疲れた。帰って夕食をとつて八時に寝に就く。

八日午後、つまり第九報投函後、七時頃からアルベルトザロンへ行って踏舞を見る。学生などに踏舞を勧められるのには閉口した。十時就寝。

(●第八十日目)

六月十日 火曜日 曇天

午前七時起床。七時から十二時まで授業。この日の朝、書籍館に行つて保護の本を借りてくる。本が沢山になつてなかなか多忙になつてきた。昼食後、シミット、ヒルトネル両氏と前山に散歩する。

夕食後ステーションに行つて体重を計つてみると、五十七キログラムあつた。先月の十日が五十六キログラムであつたから、一か月の内に一キログラム、つまり日本の二百六十六匁目増えた。嬉しいことである。しかし、この割合で増えていっては大変である。日本に帰るときには家に入ることができなくなる位になつてしまふ。

夜、宿の老父来訪。材鑑を見せる。十一時就寝。当時ドイツは三時四十分には太陽が上がり、八時十八分に入るため随分日が長く、夜になつて少し本でも読んでいると直に十時になつてしまふ。昼は呆れるほど長い。その代わり、冬になると午後三時頃に日が暮れるという。緯度から考えてみればそのはずである。

(●第八十一日目)

六月十一日 水曜日 雨天 午後雨止む

午前六時起床。七時から十二時まで授業。午後服屋がフロックコートが

出来たので持参した。何処の服屋も日延べをするものとみえ、前の日曜日の約束であったのが三日遅れとなった。

当地の最大のホテル温泉屋で陸軍の音楽と踏舞があり、学生等が誘いに来たが行かなかった。ここは入場料を取って入るところで、多くはドレスデンその他の都の人が踏舞に来ているものであるが、今日は雨天なので割に観客は少ないという。

夕食後教員等とシミット氏の部屋で、二階から往来を眺めていたら、種々の人物が同所から帰って行くのが見えた。

(●第八十二日目)

六月十二日 木曜日 雨天

午前六時起床。七時から学校へ行き十二時まで授業。今日は雨天なので散歩もできず終日勉強をする。夕方宿の所有する畑へ行き、カキツバタの花を折って帰り花瓶に差す。大変美しく、部屋に一層の光輝を添える。この日菓子を買い置きして、来客に供することにした。十一時寝に就く。

(●第八十三日目)

六月十三日 金曜日 雨天

午前六時五十分起床。ところが七時から授業があるため、大忙しで着服して出ていったが、私の時計が十分程進んでいたため、十分間に合った。この国の学校は、教師は必ず時間より十分または十五分遅く出てくると、授業の間が十分または二十分位あるので、宿が近いこともあって帰ってパシ位食べる時間が十分ある。至極便利である。

昼食後、三人の助教と後山に散歩したときに、薔薇の花が美しく咲いているのを折って帰り、花瓶に入れる。午後荒木氏から親切な手紙が来た。同氏はゴッチンゲンという所〔余程遠方〕にいる人で、大阪控訴院長荒木博臣の子である。農林学校の子科卒業生であるため知り合いである。夕食後宿の主人の居間に談話に行く。十一時寝に就く。

(●第八十四日目)

六月十四日 土曜日 雨天

午前六時起床。授業なし。終日勉強する。夕食後、一人の友人がオーストリアに出発するため、ステーションまで見送りに行く。この日フライヘルグの向井氏から迎えの手紙が届く。その概略は、「五月雨時、お互いに故郷のことなどを話し、馬鹿話に日を送るのも、強ちまん更なことでもありませんまいと思いますが、どうです、明日は幸い日曜でもありませんから、例の日本食でも食べようではありませんか。先日と違い少しは旨いものもあります。お待ち申しております」。十一時就寝。

(●第八十五日目)

六月十五日 日曜日 曇天

午前七時起床。九時三十分の汽車で往復切符を買い求め、フライベルグへ向かう。着いた時には既に他の日本人が皆集まっていた。この時、既に先月九日(明治二十三年五月九日)までの時事新報が来ていたので、久しぶりで日本の新聞を読んだ。中でも感動の深かったのは、わが最愛なる妻の名があつたことで、五月一日及び三日の両紙に診察時間改正の広告があつたことである。

料理は大きな鰻の蒲焼(むしろ蒲煮)で、飯は少しでき損なつたけれども、大変旨く沢山食べた。蒲煮に飽きた後のきゅうりの三杯酢は誠に妙であつた。また食後に桜の実が出されたが大変美味しかった。日本の桜の実はいが、ここのは大変大きく団子位はある。大変美味である。私が当地に着いた頃はまだ花盛りであつたが、既に熟して食べられるようになったのである。歳月は実に流るるがごとしというものである。

思うに日本の桜は花だけ美しく実はない。ドイツの桜は花は白色で美しくはないが、実は大きく美しい。これは或いはドイツと日本の経済の有様においても同じようなことがいえるのではないだろうか。この地の人は、実に奢らず身分相当に楽しんでいる。皆各々多少の財産を持たないものはいない。この点において実に感心する。これは例えば、学友で一卓に食す



るときでも、金のあるものは、一マルクの食事をして、金の無いものは十ペンスの黒いパンをかじなど、決して他に頼着せず、身分相当にしている。午後五時三十四分の汽車で六時半頃に帰宅。直ちに寝に就く。

(●第八十六日目)

六月十六日 月曜日 曇天、午後快晴

午前六時半起床。七時から十二時まで授業。午後近來希な好天気となったので、宿の主人に誘われるままラベナウという所に四時から散歩した。同所は一才王子と似たところで、山間で景色の良いところである。同行は近所のぢぢ、ばば十五人で一里半位のところをぶらぶら歩き、一茶亭で夕食をとりビールを飲む。この地の人は歌の本を持ち歩き、ビールに酔うのにあわせ歌を歌う。しかし何か馳走がある訳ではない。ただパンをかじつてビールに歌うだけで、最上の楽しみのように見えるのがおかし。私は山に登り、谷を渡るなどして遊んだ。それにしても景色の良いところで、断崖千尺に翠緑がこれにかり、溪流が石に当たり雪花を散らす。九時過ぎ、或いは十時頃にくたびれて足を引いて帰宅。直ちに寝に就く。皆々親切に道すがら互いに私を楽しませようと種々の話をしてくれた。

(●第八十七日目)

六月十七日 火曜日 快晴

午前六時起床。七時から十二時まで授業。宿の主人から桜の実を貰った。美味なり。また美しい薔薇の花を貰う。机上に置くと目を楽しませてくれる。夕食後シミット氏と散歩する。十一時就寝。

(●第八十八日目)

六月十八日 水曜日 晴雨不定降雹

午前六時半起床。七時から十二時まで授業。教授でもある書籍館長から、当ザクセン王国の本年の森林経済の一覽表を貰う。これには最近の財政統計が載っている。あわせて書籍館から農林経済及び財政に関する書籍を借

りてくる。これらは日本に報告して大変価値のあるものと思っている。暑中休暇になればこれを訳し、さらに私が取り調べた材料を漸次堆積しているのので、最新最確な報告を編纂することができると思っている。今は専門の方が多忙なので、その暇はない。十一時就寝。

(●第八十九日目)

六月十九日 木曜日 清書の段階で原本より筆写脱力)

(●第九十日目)

六月二十日 金曜日 曇天

午前六時起床。七時から十二時まで授業。ステットネル氏来訪。郵便切手を与える。十時就寝。

(●第九十一日目)

六月二十一日 土曜日 快晴

午前七時起床。第三報着。午前に炭焼の実習があった。午後二人の助教と植物園から同園管理長のビットネル氏宅を訪問し、同氏のイチゴ畑を見る。同氏から大きなイチゴの実一箱を貰う。大変美味しかった。

夕食後、友人カール氏が林務管補となつて転任するにあたって、同氏に招かれ葡萄酒と菓子馳走になった。十一時帰宅、就寝。

(●第九十二日目)

六月二十二日 日曜日 雨天

朝は雨がなかつたので、ヒルトネル氏と共に植物園へ行つて、木の葉數百を取り押し葉にする。五時から隣村へ二人の助教と散歩し、ナデシコの花を買い求め机上に飾る。大変美しい。十時帰宅、就寝。